

リモート授業になったら

クラス1の美少女と

同居することになった

When I got to remote class, I had to move in with the most beautiful girl in my class.

senya nihagi

三萩せんや ill. さとうぼて



書き下ろし短編

『遥の非公開ダイアリー☆授業編①』

「リモート授業になったらクラス1の美少女と同居することになった」ツイートキャンペーン ショートストーリー

©三萩せんや/SB Creative Corp. イラスト：さとうぼて

「吉野^{よし}くん、どうしよう。パソコンの様子がおかしいみたいなんだけど……」

画面を見つめたまま、隣に向けて呟く。

唇は、あまり動かさないように。困った表情も、カメラ越しに先生から不思議がられないよう気をつける。吉野^{よし}くん^のにだけ、見えるように。

「ん、おかしい？」

「うん。画面が勝手に大きくなっちゃった」

嘘^{うそ}。

私^{わたし}が大きくしちゃったのだ。あくまで「フリ」である。

吉野^{よし}くんが、私のパソコンの画面を覗^{のぞ}き込む。

カメラには映り込まない位置。

でもちょっと私が頭を傾けたら、こつん、と彼に当たってしまいそんな絶妙な距離。

「あー……大丈夫。たぶんすぐ直るよ」

そうだと思う。

少なくとも吉野くんなら、勞せず直してしまうことだろう。

というか、マウスを渡して数クリック。もう直されてしまいそうだ。

くう……さすがパソコン部、さすが吉野くん。顔色一つ変えないとか、かつこよすぎる。

好き。

このままでは吉野くんの冷静な対応により、私の嘘が明かされるまでもなく、パソコン画面は元通りになってしまう。あ、もうなっちゃったか。そつかあ……

……でも、これ、想定内なんだよね。

「ふう」

「……っ!？」

画面が直ったかチェックしていた吉野くんは、私が息を吹きかけた耳を押さえて仰け反^{のぞ}った。びっくりしている。普段の伏せがちな目は見開かれて、顔は真っ赤だ。

ああー……かわいい。ごめんなさい、堪^{たま}らない。

……じゃない。

吉野くん、嫌がってないかな？ 大丈夫かな？

思わず耳に息をかけてしまったけれど、本当はちょっと近づきたかっただけなんだよね。頬にキスしたいとか思ってたよ、全然。本当に。たぶん……

……ごめんなさい、嘘かも。

でも、そういうのは、やっぱり私からするのは違う気がするんだよね。

だから、私はあくまで、吉野くんがその気になるようにするだけ。

彼が嫌がらない範囲で……こんな風に……

「……う？」

私のマウスを握っていた吉野くんの手。

その甲に、ぴと、と触れると、吉野くんが押し殺した声を漏らした。

スリスリ、と私はそのまま指先で撫でる。

愛^{いづく}でるように。慈^{いづく}しむように。優しくスリスリする。

わあ……吉野くん、お目目がグルグルしてる。

混乱してるの？ それとも、困ってる？

触った瞬間ビクッてしたけど、画面に映っちゃうから我慢してるんだよね？

はああー……胸が苦しい。

罪悪感で？ ……ううん、彼への愛しさで昂たかぶっているのだ。

「な、ナニシテルノ、星川ほしかわサン……？」

「パソコンを直してくれた吉野くんの手を労ねぎらってるの」

吉野くんが片言で尋ねてきたので、私はしれっと答えた。

「そ、そっか……労ねぎらってくれてるのか」

「嫌？」

「いや、別に嫌じゃないけど……」

「よかった。直してくれて、ありがとう♡」

「いえ……どういたしまして……？」

嘘の下手さには定評のある私である。

パソコンの不調が嘘だって吉野くんにはバレないか少し心配だったけど、でも、大丈夫だったみたい。労いたいののは嘘じゃなかったからかな。

……と。いけない、いけない。

張り切り過ぎて、飛ばしすぎちゃった。

授業はまだ始まったばかりなのだ。いろいろやりすぎると、吉野くんに怪しまれちゃう。

画面の向こうの先生やクラスメイトたちに――は、別に気づかれてもいいかな。でも、吉野くんに迷惑をかけるのはナシだから……うん。気をつけよう。

吉野くんに構いたいけど、授業中なんだもん。我慢、我慢……

……ごめんなさい、吉野くん。無理みたい。

「え、と……星川？」

吉野くんは事態を呑み込めずにいるようだ。

私も、随分思い切ったことをしていると思う。顔が熱い。

だって、男の子の太ももをこんな風に触ったことなんて、ないんだもん。

えーと……

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい私ここまでするつもりじゃなかったんです勢い余って内側まで手が進んじやっただけなの……………たぶん。

「な、何？ どしたの…………？」

「えっと…………消しゴム？ 落としちゃったかも？」

「え、そうなの？」

「そうみたい？」

嘘である。

とっさに口から飛び出てしまった言い訳で、消しゴムは私の反対の手の中だ。今この瞬間に隠したの。アリバイ作りのために。

吉野くんの問いへの答えも、動揺して疑問形になってしまった。

……さすがに吉野くんも気づいてしまっただろうか。

「届く？ てか落としたやつ見える？ ダメそうなら、俺の消しゴム使っていいよ」

きゅん、とした。

焦る私のやましい気持ちに、吉野くんは気づかないらしい。

それどころか氣遣^{きづか}ってくれて……本当、なんて優しいんだろう。

「……ありがとう、吉野くん」

私のいたずら——邪^{よこしま}でふしだらな行為を嫌がらないでくれて。

本当はね。こういうこと、吉野くんからして欲しいんだよ？

これくらい私にやつてもいいよ、って示してるつもりなの。

でも、吉野くんは簡単に私の誘いに乗ってこない。星川のことはいやらしい目で見てないよっていうように、常に澄ました顔をしてる。

私に興味がないのかな？ ちょっとはあると思いたいんだけど……

でも、これも想定内。

だって私は、そういう吉野くんだから好きになったのだ。

だから、吉野くんが乗ってくるまで私は誘うことにした。



授業中に何度も何度も……吉野くんのことになると欲望のリミッターが壊れちゃうみたい。抑えなきゃって思ってるのに、気づいたら吉野くんへのいたずらは通算——ええと、私、何回やっちゃったんだろう？ 十回……は超えちゃった気がするんだけど。

回数を覚えていないくらい、やっちゃったってことだね。私が楽しんでるだけじゃないといいんだけど……楽しんで……楽しい……

……うん。楽しかった。

私、すっごく満足してる！

授業中だったのに。いけないことなのに。

吉野くんを困らせちゃったかもしれないのに。

気づけば、授業は終わっていた。

私が吉野くんに夢中になってる間に……あつという間だった。パタン、とパソコンを閉じて、私は隣に向かって言う。

「吉野くん、授業お疲れ様♡」

平静を装ったつもりだ。

でも、私の顔は、たぶん愉^ゆ悦^{えつ}の余韻でにやけてしまっていたと思う。

ああ。

どうか、吉野くんに嫌われていませんように。

吉野くんも、楽しい時間だったと思っていてますように……

